

## 自分の「軸」が 作られた二年間

元来、試験のための勉強は苦手だが、好奇心、知識欲は弱い方ではないので、いろいろなことを考える投資に関わる仕事との相性は良いようである。サラリーマンの割には極めて不安定な足取りの人生でも、さほど不安を感じることもなかった。この妙な自信⇨開き直りのような

精神のルーツは不明ではあるが、UWCの影響は小さくない。

教育の大きな目的の一つは自立した人間を育てることである。「他人の釜の飯を食わせる」、「苦労は買ってでもしろ」といった子育てのお決まりの諺はUWCにも当てはまる。人間は、多少の挫折や苦労が多いほど、モノを考え、成長するのであろう。私のUWC留学でも、日本の高校生活とは異質の苦労と、数多くの失敗・挫折感そして達成感を味わうことにより、自分の「軸」が作られたようである。おまけに、二年間の寮生活は体力、根性といった要素までも鍛えてくれた。同室だった二人はアフリカのウガンダとカナダ北部の出身で、部屋が暑い寒いなど滑稽かつ過酷な二年間であった。

## 「考える力、判断する力」を 育てる教育

UWCでは世界各国の大学入学資格となる国際バカロレア(取得準備)が学業の主軸となるが、これがなかなかの曲者である。深く掘り下げたカリキュラム、少人数の対話形式の授業が中心で、試験も○×式の設問は少なく、やたら文章を書

かされる。あえて一言で表すと、問題をよく理解し、自分で考え、意見をまとめ、その内容を他人に伝える能力を培う教育である。その結果、学問を通じて「考える力、判断する力」を育むこととなる。実際、社会で直面する問題は、学校の試験とは違い、一つの美しい正解が存在することは非常に稀である。価値観が多様化し、情報があふれる今の時代において、自分で考えて判断することは極めて重要なことであり、UWCへの留学はその能力を伸ばすための教育機会として実に優れた選択肢の一つだと思う。

今年も、新入生がUWC各校に派遣されるが、その準備の一助として卒業生が主催しているオリエンテーション・キャンプに二十数年ぶりに参加した。期待と不安と共に留学した昔の自分や、留学中のさまざまな出来事を思い出しながら、UWCについて再考する良い機会となった。そして改めて、UWC日本協会と、この奨学金制度を支えていただいているスポンサーの皆様へのお礼の気持ちとともに、恩返しの方法を考えながら、人生も仕事もチャレンジは続けていきたいと思っ



7月に行われたUWC奨学生のためのオリエンテーション・キャンプで、今年の秋から派遣される新入生と(中央が筆者)

# UWCで鍛えられる 「考える力、判断する力」

ソシエテ・ジェネラル・アセット・マネジメント  
ストラテジスト **高野雅永**

このの まさなが

一九七九年UWC英国アトランティック・カレッジ(A.C)卒。八四年慶應義塾大学商学部卒、山一証券入社、九七年にSBCウオーバーク証券(現UBS証券)へ転職し、その後、ドイツ証券、HSBC証券を経て、二〇〇六年から現職。

## ◆新米「占い師」のチャレンジ

今年の春より、私はソシエテ・ジェネラル・アセット・マネジメントというフランス系の資産運用会社で「株が上がりそう、下がりそう」などと喋ったり書いたりするストラテジストという占い師のような仕事をしている。私の職歴は証券会社での営業、調査の仕事が大半を占め、大きな声では言えないが、運用会社のストラテジストとしては若葉マークが付いている。小学生の息子からも「ちゃんと安く買って、高く売っている？」と厳しい質問が飛んでくる。四〇歳という節目の年はずいぶん前に通過したが不惑の境

地にはほど遠く、自分の将来の見通しは視界不良気味である(人生の占い師としての腕はかなり怪しい)。ただ、今の会社は実に面倒見が良く、今年の冬も夏に続き英語とプレゼンテーションの研修にわが母校、英国アトランティック・カレッジ(A.C)の近くにある田舎町、BIBBへ放り込まれる。たしかに「占い師」の話術は上手いに越したことはない。久々の勉強で知恵熱が出そうである。

## ◆綱渡りのサラリーマン人生

七九年にA.Cを卒業し、慶應大学へ進んだが、履歴書の出身学部の欄に思わず開基部卒業と記入しそうな学生生活を過

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四〇七名の卒業生を輩出している。

ごした後、「これからは証券の時代だ!」という言葉に釣られて、深い思慮もなく山一証券に入社した。ただ、良くも悪くもこの選択のおかげで、サラリーマン・証券マンとして、数々のイベントと遭遇することとなる。国内支店勤務、ロンドン支店への派遣、シンクタンクへの出向とさまざまな仕事を経験できたが、九〇年代中ごろにはデフレが悪化し、日本の金融業界を取り巻く環境は一段と厳しくなり、私も九七年に転職に踏み切った。しかし業界の荒波は治まらず、辞めた会社は廃業となり、転職先の会社では新たな合併が発表され、またその合併相手が潰れたり、金融史に残るような出来事の当事者となった。その後はヨーロッパを一周するように、順にスイス、ドイツ、英国、そしてフランス系の金融機関で働きながら、自分で判断することの重要性を認識していった。